

深谷市名誉市民 元深谷市長

故福嶋健助市民葬



多くの市民が献花を行いました

謝辞を述べるご遺族

深谷市名誉市民・元深谷市長福嶋健助氏が、9月8日、ご逝去されました。満74歳でした。

10月8日、深谷市民文化会館大ホールで、福嶋氏の市民葬が厳粛に執り行われました。

式典では、副知事をはじめ近隣の首長ほか、別れを惜しむ740人の参列者による献花が行われ、ご冥福を祈りました。

市民葬会場には、在りし日の写真などが数多く掲げられ、参列されたかたがたが、氏のご遺徳をしのばれていました。

武者と生まれて描く虹

畠山重忠伝説



屋島の戦い

一ノ谷の合戦で源範頼・義経軍に敗れた平家軍は、讃岐国屋島へと逃れた。

元暦二年(1185)二月、源義経は摂津の大物ヶ浦から阿波の勝浦に渡り、さらに進んで讃岐の屋島に進んだ。

大物ヶ浦を出航する時、戦奉行梶原景時は、「逆櫓」の進言をする。景時は「逆櫓とは船の舷に向て櫓を立てること。敵が強い時は舷の方の櫓で押戻し、敵が弱ければ元のように舷の櫓をもって押し渡す」と言った。しかし、義経がこれを一蹴した。景時は「将たるもの、あらゆる場面を想定して準備怠ることなきとすべきもの」と反論したところ、義経は「主人を猪武者と愚弄するか」と怒った。景時は「なにお、主人は鎌倉殿一人にてござる」と反駁した。両者がまさに争いにならんばか

りの時、重忠が景時の背後から抱きとめ、二人の諍いを宥めた。二月十八日午前二時、暴風雨の中、義経は船を出す。兵船は数多あるが、大風のため船を出す者はわずかに五艘。一番が判官(義経)船、二番が畠山(重忠)の船、三番土肥船、四番和田船、五番佐々木船である。勝浦に到着し、そこから屋島へ渡り、平家軍と一進一退の攻防を続けた。いつしか休戦状態になり、辺りが静けさを取り戻した時、静かに一隻の船が義経軍の前に姿を現した。

そこには美しい女官が、「これを射って見よ」とばかりに扇をかざした。重忠は、扇の的を射よと義経に命ぜられるも固辞し、那須与一を推した。与一は馬を海に乗り入れ、「南無八幡大菩薩」と叫び、見事に扇の柄を射抜き、扇は空を舞い海に落ちた。「平家物語」の名場面「扇の的」である。

夢

なかるべからず

ハート前向きしゃべりリスト



えんどうりささん
遠藤里沙さん

1134kHz

曜日の午後。もう少しで3時になる時刻。伊東四朗、吉田照美という喋りのベテランを前にして、談笑しながらも緊張感が頂点に達しそうだ。3時ジャスト。東京浜松町の本社ス

タジオから1134kHzの電波に乗ってしつとりと落ち着いた声に心に響く。先ほどまでの緊張感は微塵も感じさせない。どんな状況に置かれても、その状況を楽しむ心で、気持ちを前向きに進める女性。文化放送アナウンサー 遠藤里沙。

阪神・淡路大震災

小 学生の時、遠足のバスで司会役を務め、周囲を盛り上げる遠藤に、担任の先生が言葉で掛けた。

「里沙ちゃんアナウンサーに向いているかもね」



伊東四郎さん、吉田照美さんと番組を始めて1年。かつては「里沙ちゃんのくだもの食べようかな?」というコーナーもあるほど食には興味を持っている。ついに「食育インストラクター」の資格を取得。現在は「ベジタブル・フルーツマイスター」資格取得にチャレンジ中!!

「向き不向きより、前向き」
遠藤の向かう前には、夢がある。

平成七年一月。心の奥に閉じ込められていた夢を、眠りから覚ます事件が起こる。「阪神・淡路大震災」。この震災を被災地から伝え、被災者の言葉を代弁し、温かい言葉を語りかけ

るアナウンサーの姿に心が動いた。夢が再び頭を擡げてきた。

向き不向きより

冒 標であったアナウンサーになつたが、それがゴールではない。今は「人との触れ合いを通して、自分の想いを伝えること」に視点を定めている。

一つの選択肢として、「朗読」という手段を選び、そしてこの夏、あるスクールの講師となった。朗読は第三者である作者の想いを代弁するものだが、自分しか伝えられない行間がある。活字では伝えられない行間の想いを、遠藤は大切にしている。

好きな言葉は、

「向き不向きより、前向き」
遠藤の向かう前には、夢がある。

夢七訓

- 夢なき者は理想なし
- 理想なき者は信念なし
- 信念なき者は計画なし
- 計画なき者は実行なし
- 実行なき者は成果なし
- 成果なき者は幸福なし
- ゆえに 幸福を求める者は 夢なかるべからず

(本文中の敬称は本人の承諾を得て省略しています)